2016.11.25
No.198

編集・発行人　樋口みな子
E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送6号分1,000円）

2016.一年を振り返って

10月、冠雪した旭岳

今年は例年になく早い雪で寒さも厳しく、いよいよ冬本番です。

安保法制が、強行採決さてから１年がたち、政治がますます混迷しているのを実感します。

アメリカのトランプ氏の移民への蔑視、女性差別や排外主義に驚きましたが、沖縄の高江ではヘリパッド抗議を行っていた市民が、大阪府警の機動隊員から「こら、土人が」という言葉を投げつけられました。「黙れ、シナ人」という暴言も吐いたのです。暴行も相次ぎました。

沖縄の芥川賞作家である目取真俊さんが、沖縄タイムスに寄稿した文章「沖縄への無理解が噴出」の一部を引用します。「沖縄島北部の限られた地域にこれだけの機動隊が集中し、長期にわたって市民弾圧に乗り出している。こういう事例が過去にあっただろうか。7月22日にN1ゲートの車両が強制撤去され、ヘリパッド建設工事が本格的に始まって以来、高江の現場は戒厳令が敷かれたかのような異常事態が続いている。そのような中で『土人』『シナ人』という差別発言が発せられた。それはヘリパッド建設を強行するため、抗議する市民を暴力で抑え込むことを正当化しようとするものだ。きちんと琉球・沖縄の歴史を学ぶこともせず、理解しようともしていない。歴史的にある沖縄への差別と在沖米軍・自衛隊の強化、中国脅威論が結びつき、新たな差別意識が生み出されている。

安倍晋三首相がヘリパッドの年内完成を公言しそれが現場に圧力をかけて、市民への弾圧の強化を促している。高江や辺野古はそれが露骨に現れる場所だ。だから隠れていた差別意識も噴き出す。そもそもヘリパッド建設強行自体が差別そのものなのだ」と書いています。

駆けつけ警護が閣議決定され、自衛隊が南スーダンに派遣されました。殺し、殺される現実が迫っています。息子はぽつりと「戦争に反対するデモがあったら、俺も戦争イヤダ！と叫ぶよ」。私もデモに参加して、声を上げていこうと思います。

今年は親しい友人たちが亡くなり、身内の急死もありました。9月には、銀のしずく記念館の館長、横山むつみさんが、11月18日に、泊原発の廃炉をめざす会の事務局長の森山軍治郎さんが亡くなりました。「留萌文学」に森山さんが寄稿された「ぼくの選択がん患者になって」を読み返しました。森山さんは2014年に咽頭がんと診断され、外科手術や抗がん剤投与はしないことを決意され、自分の意思を尊重してくれる医師や病院を探し、事務局長を全うされました。「ぼくの選択・・」で「将来において再発・転移してもぼくは怯えていないし、恐れてもいない。その時もがんは自分の一部としてつき合うだけだろう。これからもぼくの自分自身の選択で生きていくだろう」と記しました。75歳。果敢に自分らしく生き切った人生でした。おおらかな人柄を私も敬愛していました。

東北でまた大きな地震がありました。3.11の恐怖がよみがえりました。原発は地震などで複合災害となって被害を大きくします。全ての原発の稼働はやめてほしい。泊原発の再稼働を許さない運動に全力をあげたいと意を強くしました。

素敵なこともありました。6月に吉岡しげ美さんのコンサートを開くことができました。赤字も覚悟で計画しましたが、多くの方に弾き語りの素晴らしさを伝えることができたのが嬉しかったです。

来年3月には銀河通信が200号に達する予定です。これからもご愛読をお願いします。

植村隆のソウル通信

ローソク大集会で考えたこと

ソウル市内での講演会に向かうため、11月12日午後カトリック大学の地元・駅谷（ヨッゴク）駅から地下鉄１号線に乗った。私の大学はソウルにすぐ隣接している富川(プチョン)市にある。仁川(インチョン)とソウルの間にある都市だ。この地下鉄１号線は、その仁川とソウル中心部を結んでいる。地下鉄は超満員だった。

写真1

この日は、ソウル市中心部の光化門（カンファムン）周辺で朴槿恵（パク・クネ）大統領の退陣を求める大規模なローソク集会が計画されていた。この１号線は、集会の集結場所であるソウル広場のある市庁(シチョン)駅に直通で行けるのだ。私は途中で、地下鉄２号線に乗り換えなければならなかったが、超満員で身動きが簡単にとれず、下車するのに苦労した。車内で誰かが「大統領一人のためにこんなに混んだ」という趣旨の言葉を発した。この車内の多数の人びとも、集会に向かっているようだった。

私も集会に行きたかったが、私が講師の講演会なので、キャンセルするわけにはいかない。集結場所とは反対の江南(カンナム)地区にある講演会場へ向かった。

講演は午後６時すぎから、８時ごろまであった。日本人や日本語を解する韓国人が３０人以上集まってくれた。質問も相次ぎ、盛り上がった。講演会の後、近くのビヤホールで懇親会が開かれた。

■主催者発表１００万人

写真２

ビヤホールでは壁面の大きなスクリーンでデモを生中継するテレビの映像を映していた。まるでパブリックビューイングである。「主催者発表１００万人、警察の推計26万人」などという情報も字幕で流れていた。私はその映像を食い入るように見た。しかし、画面で見る限り、大きな混乱はなく、警察側も、デモ参加者に対して、力で対応している感じはなかった。デモ隊も暴力的ではなかった。懇親会参加者の韓国人の男性が「韓国のデモもレベルが上がった」と話していた。

テレビの画面では、「地下鉄１号線も終電を延長する」と伝えていた。「やはり現場に行こう」。懇親会が終わった後、集会の現場に行くことにした。友人の日本人と二人で江南駅から地下鉄に乗った。

午後11時20分ごろ、デモの最前線にあたる地下鉄景福宮（キョンボックン）駅に着いた。４番出口は、警官隊が階段に集結し、封鎖していた。「これは大変だ」と思って、反対側の出口から、地上に出た。周辺には、まだ多数の人々が集まり、「朴大統領は下野しろ」などと叫んでいた。

大統領の住む青瓦台(大統領府)に一番近い、交差点付近が最前線だった。そこで集会参加者と警官隊が対峙していた。人々が密集していたが、比較的簡単に最前線まで行けた。大統領府に向かう道には、警官隊が巨大なフェンスを設置し、それより前に進めないようにしていた。その場所で、集会参加者はフェンスを開けろとか、大統領下野のスローガンを繰り返していた。しかし、デモ隊も警察官隊も暴力を使うことはなかった。

■解放区の祝祭のよう

写真３

民主化運動が高揚していた１９８７年当時、私はソウルに留学していた。その時は、デモには催涙弾がつきものだったが、今回の集会ではそういうものもなく、人は多いが平和的なムードが漂っていた。恋人同士や、家族連れの姿も見えた。光化門周辺は、交通が遮断され、広い道を人々が行きかっていた。複数の場所で、コンサートをしていた。まるで解放区で祝祭をしているような雰囲気が漂っていた。その一方で集会で出たゴミを集めている人々もいた。デモ参加者のようだった。

光化門広場の李舜臣銅像周辺にはたくさんのテントが張られていた。ここで泊まるのだろうか。銅像前では１３日に日付が変わっても集会が開かれていた。「終電に遅れるかもしれない」。急に不安になって、地下鉄市庁駅に急いだ。途中、たくさんの屋台が出ていた。焼き鳥、焼きイカ…、カップヌードル、ビールなども売っていた。いいにおいがしている。うまそうだ。腹ペコだったが、乗り遅れると困るので、じっと我慢。午前０時１５分ごろ、駅のホームに下りたが、もう富川駅まで行くのはなかった。手前の九老(クロ)駅までの終電に乗った。そこから苦労して、タクシーに乗って、大学のゲストハウスに戻った。

翌13日、日曜の朝、韓国の新聞がどんな報道をしているか、読もうと思ったが、毎週日曜日は休刊日だったことに気づいた。購読している韓国経済新聞も、日曜日は休みだ。仕方ないので、ネットで見ることにした。

韓国経済新聞電子版の見出しは、「『大韓民国は偉大だった』100万人ローソク集会平和的に終わる」とあった。ゴミも残さず、混乱もなく、集会が終了したことを讃えていたのだった。

同紙は、集会参加者の女子高生の声も伝えていた。朴大統領の母校である聖心女子高校の生徒たちが、集会で壇上にあがり、こう発言し、下野を求めたのだという。
「『真実、正義、愛』という校訓は、先輩(朴大統領)のどの行動からも見出せません。私たちはあなたを大韓民国の代表と思って生きていく自信がありません」。

写真4

■燃えたぎる反朴感情

朴大統領が親友の崔順実(チェ・スンシル)容疑者に機密文書を渡していた疑惑や文化やスポーツに関する二つの財団の設立をめぐる不正疑惑などで、韓国の人びとの朴大統領に対する怒りが激化している。12日の集会は21世紀に入って最大の規模だったという。

10月29日、11月5日に続き3週連続の退陣要求集会だ。その度に参加者が増えている。その一方で、朴大統領の支持率は、落ちている。韓国ギャラップの世論調査によると、最新の調査（8日～10日)では支持率は歴代大統領最低の5%で、否定的な評価は90%。20代の支持率は0%だという。まるで、「風前の灯」のような支持率ではないか。

デモは平和的でも、韓国の人びとの反朴感情は燃えたぎっている。

写真1　大統領府に近いデモの最前線。警察当局はバリケードをつくってデモ隊の進入を防いでいた。（11月12日夜、ソウルで）
写真2　光化門広場の李舜臣（イ・スンシン）銅像前では13日に日付が変わっても集会が開かれていた。
写真3 青瓦台（大統領府）と書かれた棺のようなものが路上に置かれていた。市民たちは、その前にローソクをささげていた。
写真4　地下鉄市庁駅に貼られたポスター。朴大統領が崔順実氏にマリオネットのように操られている。

韓国の市民はなぜ闘っているのか－手続き的民主化から経済的民主化へ

今の韓国の市民の闘いは、たんに朴槿恵大統領を権座から引きずり降ろして、野党勢力の政権を樹立するだけではない。韓国の市民は、権力－官僚－メディアを結ぶ腐敗構造の総体として既得権体制と闘っており、1987年に自らの手で勝ち取った「手続き的民主主義」を次の段階に移行しようとしている。つまり、今回の市民の闘いは「経済的民主主義への移行」の要求である。（略）それが裏切られ、むしろ手続き的な民主主義も危うくなっている状態に陥った。このような状況で、市民たちは自由や民主化に逆行する既得権体制に抗議し、さらに社会化という最後の段階まで民主主義を移行させようとする闘争が展開されているのである。社会化を求める闘争は、機会の平等、分配の公正性などを要求する。野党を含む既成体制に全面的に抵抗する可能性があり真の革命まで発展するかも知れない。（朴権浩さん寄稿）

朴権浩さんのプロフィール　：1967 年韓国生まれ。中学生の時に光州民衆抗争を経験。1986年ソウル市立大学に入学し当時の軍部独裁政権に反対して学生運動に参加。9月北大大学院博士課程修了。研究者

俵義文さん講演
「日本会議とは何か」

11月4日、植村裁判を支える会の口頭弁論と報告会の後に、俵義文さん（子どもと教科書全国ネット２１事務局長）が「日本会議とは何か」について講演しました。

■植村さんの勝利を確信

今日の法廷に、見たことがある弁護士がいました。南京事件をめぐる２件の裁判で、虐殺事件を否定する側の弁護団長でした。当時、その隣にいたのが今の防衛大臣稲田朋美弁護士です。敗訴してから彼女が書いた南京事件の本が自民党の安倍晋三幹事長代理の目に留まりそれが政界入りのきっかけだったそうです。

沖縄戦集団自決の軍関与が争われた裁判を含め連戦連敗してきた弁護士の顔を見て、植村さんは絶対勝てると確信しました。

日本軍「慰安婦」問題を展示する「女たちの戦争と平和資料館」に先月、爆破予告の脅迫状が届きました。実は慰安婦に関連する同様の脅迫は１９９６年にありました。中学校の９７年版教科書に日本軍「慰安婦」の記述が登場すると報道された年です。報道直後から右翼や右派の学者・メディアによる教科書「偏向」攻撃が始まりました。

当時私は出版労連の教科書対策部長で、各労組を通じて教科書会社への様々な圧力を調べていました。嫌がらせの中には社長の自宅の写真を同封し、朝日新聞襲撃の犯行声明「赤報隊」を引き合いに「草の根を分けてでも探し出す」と社長や執筆者へのテロをにおわせる卑劣極まりないものがありました。

■架空の話を語る「戦うジャーナリスト」

植村裁判の被告、櫻井よしこ氏が「戦うジャーナリスト」と右派にもてはやされるようになったのはこの時期です。横浜市教委が９６年１０月、櫻井氏を招いて教職員研修を開きました。テーマは「国際理解を深めるために」。櫻井氏は途中から、頼まれてもいない慰安婦問題に話題を移していきました。「慰安婦は強制連行ではないというのが私の信念である。私が愛し尊敬する両親と同じ世代の良き日本人たちが、南京事件を起こしたり強制連行をするはずがない。私の血の中から疑問を感じる。２つの事件は日本の学校では誤って教えられている」。朝鮮の植民地化を正当化し、福島みずほ弁護士（現参議院議員）との架空の作り話も語りました。

人権団体などの抗議、申し入れで神奈川、兵庫、埼玉県などで予定されていた櫻井講演は全てキャンセルされました。櫻井氏はこれを朝日新聞で「言論弾圧」と主張。右派ジャーナリズムが取り上げ、読売新聞は社説でも書きました。今は日本会議の広告塔で中教審

委員、天皇の生前退位について有識者会議が意見を聞く「専門家」の1人です。

改憲実現をめざす極右政権の安倍内閣は、閣僚20人のうち16人が日本会議議連に所属しています。日本会議は９７年５月、天皇中心国家をめざす「日本を守る国民会議」と宗教右翼組織の統合で発足しました。ともに元号法制化（７９年）の運動から生まれ、「憲法改正」をめざしてきた右翼団体です。

草の根改憲運動を展開する「美しい日本の憲法を作る国民の会」の設立総会（2014年10月）で衛藤晟一首相補佐官は「最後のスイッチが押される時が来た。最終目的の憲法改正のために第2次安倍内閣は成立した。参院選がある平成28年のそのときまでに、われわれが憲法改正を実現する状況をつくるかどうか、その１点に尽きる」と発言しています。

この「国民の会」共同代表は、日本会議の会長（田久保忠衛）、名誉会長（三好達）と櫻井氏の3人。1000万署名運動に取り組んでいます。憲法改正の国民投票で過半数を得る基礎のための1000万で、今年5月3日発表の700万人から7月末754万人、目標達成府県24。日本会議の都道府県本部や地域支部などが機能していることをうかがわせます。

安倍政権の改憲運動は、93年7月総選挙で自民党が敗北、野党となったことが出発点でした。日本軍「慰安婦」に軍の関与を認めた河野官房長官談話（93年）、細川護熙首相の「日本の戦争は侵略戦争だった」発言、戦後50年国会決議をめぐる対立は激しくなり、教科書問題も対立の舞台でした。

日本会議は60～70年代の右翼・民族派学生運動の活動家がコアメンバーで、宗教団体「生長の家」出身者たち。支部249、会員3万8千人。元号法制化、国旗国歌法制定、教育基本法改正、道徳の教科化を実現させ、選択的夫婦別姓法案や外国人地方参政権法案反対などを掲げています。日本会議地方議員連盟（会員1630人）と連係して議会決議を挙げて、地方議会から目標実現をめざす活動も進めています。

■議員連盟を通じて次々に要求を実現

日本会議の議員連盟が作られていることは、彼らにとっても私たちにとっても非常に重大な意味があります。これまでの右翼運動は、ことがあると議員と連係する時限立法的な関係が常でした。それが恒常的に、合同の役員会や勉強会を開いたり、議連の勉強会に日本会議の学者や文化人を講師にする日常活動になってきました。日本会議の幹部には安倍のブレーンが並んでいます。

そして日本会議の要望、方針が、議連の国会議員によって様々に具体化され実現している状況が生まれています。たとえば文科省が02年に小学校に配った道徳の本「心のノート」です。道徳を教科にし教科書を作れという日本会議の主張を議連所属の議員が国会で質問したら、議連会長代行の中曽根弘文文部大臣は「検討する」と答弁。1週間後に本を作ることが決まりました。日本会議は「われわれの要求が国会質問で実現した」と成果を誇っていました。

同様の事例は教育基本法改悪（06年）でした。「人格の完成」をめざす子どもが、国家や大企業のための人材に変わり、教育基本法を全面実施する学習指導要領は家族や地域も縛る内容になります。そこにも日本会議が大きな役割を果たしています。

日本会議が今、何よりも力を入れているのは憲法改悪です。しかし簡単にはいかないことも事実です。そこで狙っているのは緊急事態条項から手をつけることです。大規模な災害などに対応するためなら受け入れられ易いという考えです。緊急事態宣言で、ナチスが憲法に拘束されず無制限の立法権を握った全権委任法と同じ役割を果たします。戒厳令と同じで、極めて危険な手法と言わなければなりません。

2016年11月4日札幌市教育文化会館で(まとめ構成： H．H)

「おんな･こどもは抑止力」
福島みずほさんのお話を聞いて

11月12日札幌市内で福島みずほさんを講師に、憲法学習会「おんな・こどもが抑止力」が開かれ70人が参加しました。主催は「親子で憲法を学ぶ札幌の会」です。

自民党の「日本国憲法改正草案」は国民を縛るものでとても憲法とは言えないと断じました。13条では個人の尊重と公共の福祉が明記されていますが、改憲案は個人の尊重を人間の尊重に変える。24条は家族生活における個人の尊厳と両性の平等が記されていますが、改悪されると、家族は社会の自然かつ基礎的な単位として、尊重される。家族は互いに助け合わなければならないとなり、個人ではなくなります。「個人を尊重」しない国家主義的な社会を目指すことが明らかです。

福島さんのお話にもたびたび登場しましたが、私は10数年前、憲法24条草案を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさんにインタビューして、記事を書く機会がありました。

当時、家制度によって、女性が苦しめられてきたことを知り、家族の中で、女性、子どもの権利が保障されることは、日本の女性たちの切実な願いだと受け止めて草案を書いたのです。

最も危険なのは「緊急事態条項」で、自然災害や内乱等で行政府が緊急事態と宣言した場合、内閣は勝手に法律をつくり、総理大臣は勝手に予算を使って、勝手に地方自治体に必要な指示を出すことができてしまいます。福島さんはこの緊急事態条項の危険性も指摘しました。この条項、期限を設定しないところが最も危ないとし、今の改憲論議に乗ってはいけないと呼びかけました。

エッセイ

小さな望遠鏡

小学校5年頃だったと思いますが、札幌の西屯田通りに模型やさんがありました。入口の窓越しに天体望遠鏡のキットが売っていました。口径は４ｃｍくらい、プラスチックの枠がついていました。筒を自分で作らせるしくみで、値段は数百円だったと思います。これが、私が初めて手にした望遠鏡でした。シングルレンズですが、焦点距離が長く、といっても、５０ｃｍくらいだったと思いますが、よく見えました。

暗いバックに光っている、名も知れぬ星々を小さな望遠鏡で見ていた記憶があります。

中学校になってから、少しグレードアップして、口径６ｃｍのアクロマート（２枚合わせのもの）の対物レンズを、大通りのエイコーという会社の営業所に買いに行きました。値段は三千円で、これも筒は自分で、コークス煙筒につけて、台も作ってみていました。

ある早朝、ベネット彗星を見ていました。新聞配達のおじさんに見せた記憶があります。大きな彗星で象牙色をして、放物線の形をして、よく見えました。

最近読んだ『人はなぜ星を見上げるのか』高橋真理子著の中に、市瀬さんという盲目の方が書かれた詩があります。「今夜僕は散歩にでかける・・星はみえているだろうか・・そう思うだけで心があたたかくなる」この詩にうたわれている感覚、今は失われている感受性が、少年時代には確かにあったことを思い出させてくれました。

私の星の思い出は、楽しいことばかりではありません。札幌南高という進学校の２年生のころ、私は持っていたレンズを粉々に砕いてしまいました。受験勉強という壁にぶつかってしまったのでした。今思うと、星が好きなら、天文学者や、光学会社に入ることも可能だったかもしれませんが、そういう風に考えることができませんでした。

理科教師として網走管内の滝の上中学校に赴任してから、科学クラブの生徒と再び星を見始めました。教材として、教員住宅の裏で、ペンタックスで、標準レンズで固定撮影をしたスライドがありましたが、後で札幌に来てから、それを見直すと、その星の輝きがものすごいことに気が付きました。バックの空が暗いのです。

当時、私の興味の対象が日高層群という地層のことがあり、そちらに気を取られていたせいもあって、星にのめりこんでいたわけではありませんでした。今思うと、もっともっと星を見るべきでした。（写真・10月、追分で観測したアンドロメダ星雲）

あのころの生徒は、今どうしているか、星を見ているかなと思ったりします（樋口澄生）

本 BooKs

沖縄の新聞は本当に「偏向」しているのか

安田浩一著　朝日新聞出版
1400円＋税

「普天間基地は田んぼの中にあった。周りには何もない。そこに商売になるということで人が住みだした」と発言した作家の百田尚樹さん。こんなデマがまことしやかに語られるのは、沖縄に対する、蔑視、差別だと、琉球新報と沖縄タイムスが抗議声明を出したのは2015年のことでした。

在日韓国人へのヘイトスピーチや、外国人労働者の差別と貧困などをテーマに取材をしてきた、ジャーナリストの安田浩一さんが、沖縄2紙の現職記者やOBに取材してまとめたのが本書です。

取材された記者たちは「住民の苦痛を共有することが記者の役割」「メディアの大事な役割の一つは公正な社会を作り上げること」「紙面には軸足というものがあります。それをどこに置くか。当然ながら沖縄ですよ」「沖縄で記者をするということは、戦争と正面から立ち向かうことだ」と語ります。

沖縄で、地に足をつけて、住民の声を丹念に拾い上げてきた矜持に胸がすく思いがしました。

戦争で苦しめられた沖縄の人々は、今度は日本の70パーセントを超える基地を押し付けられ、米兵による暴行事件も頻繁に起きています。今も、「毎年ヘリが空から落ちてくる」現実があります。記者は基地問題は「人権問題だ」と語ります。先日は、高江ヘリパッド建設に抗議する市民に、機動隊員が「土人」と差別意識むきだしの蔑視の言葉を浴びせました。

戦前の関西では「琉球人、朝鮮人お断り」という張り紙があったといいます。この植民地的差別と偏見が今も根強く残っているから危険な米軍基地を押し付けて平然としているのだと、取材された記者たちは怒ります。

ヘイトスピーチをする側にも言論の自由はあるという反論に「人権を守る立場で書くのが新聞である」と権力に屈しない記者魂。

私もジャーナリズムは生きていると感動しました。

沖縄の問題は日本の問題でもあることを、改めて考えさせてくれた1冊でした。

死ぬまで踊り続ける

嘉門衛信著　安川誠二・聞き書き
寿郎社　　1800円＋税

北海道で花柳流から独立して「嘉門流」を立ち上げた舞踊家、嘉門衛信さんの半生を描いたのが本書です。聞き書きは安川誠二さんです。

格別、踊りに関心があったわけではありませんが、これが滅法面白くて、読み始めたら辞められなくなりました。

衛信さんは室蘭の中学を卒業した１５歳で、当時一世を風びた花柳徳平衛師匠に弟子入りし舞踊一筋に生きてこられました。衛信さん、泣き笑いの波乱万丈の５５年を語ります。

内弟子時代の厳しい修行生活に泣いた日、徳平衛師匠から受けた薫陶、その後の全国での活躍、師匠亡きあと、衛信さんは当時の団員と「徳平衛日本舞踊学校」の借金返済にキャバレー周りのショーや、バーテンダーなどで必死に稼いだことなどを、時にユーモラスに語ります。この辺は、安川さんとの長年の付きあいで、信頼関係があればこその臨場感があふれます。

その後、室蘭に帰郷してからは、北海道を題材にした創作舞踊を次々と発表し、新しい日本舞踊の世界を切り開くのです。ここからが衛信さんの真骨頂。「心で舞う」「大衆の心に生きる舞踊」を次々と発表します。室蘭の歴史を元に創作した「仏坂」は「権力に虐げられ犠牲になって死んでいった名も知れぬ人々のために、彼は怒り、涙し、ひたむきに舞うことによって心底は優しい人の心を持った彼ら荒くれの霊に鎮魂歌をささげようとしている」と評されました。先住民であるアイヌをテーマにした創作などにも取り組みました。

花柳流といえば、師範になるまでには相当のお金がかかります。「大衆に語りかける踊り」とは何かと問い続け、2001年に花柳流から独立。新しい流派「嘉門流」を立ち上げます。

一方では衛信さんは30年以上にもわたって、室蘭聾学校の生徒たちにボランティアで、日本舞踊を指導しました。どれほど困難なことだったかと思います。衛信さん自身が、小学生の時に左目に大けがをして、今は失明しています。障がいがあっても子どもたちが、踊りを通じて生きる喜びを感じて欲しいという衛信さんの思いに心揺さぶられました。

安川さんの解説に「衛信さんが創作した舞踊には社会的なメッセージが盛り込まれている。しかもそのメッセージには強者に虐げられる者たち、世の中で弱い立場に立たされている人たち、そういった弱者からの視点が必ずある」と書いています。この本で踊りの奥深さを知りました。

衛信さんの思想を踊りで表現するまでの人生が詰まった１冊です。

人はなぜ星を見上げるのか
星と人をつなぐ仕事

高橋真理子著　新日本出版社
1800円＋税

著者の高橋さんは山梨県立科学館で約２０年間、プラネタリウムの番組を制作して、「星と人をつなぐ」活動をしてきました。本書は、その仕事を通して見えた人の思いや未来を語ります。

番組の中には、戦争中、爆撃機を敵地へ導く目印として「星が武器になった」事実を描いたエピソードを紹介したものもあります。戦争体験者の多くは、その記憶にふたをするようにして誰にも語らずにきたのです。そんな一人からの貴重な証言が番組に生かされました。

高橋さんは参加者自身が思い出の星空の下で、語り合うワークショップや、視覚障害者に宇宙を感じてもらう活動などをしてきました。

さらに活動の幅を広げようと、科学館を退職して仲間たちと「星つむぎの村」というプロジェクトを立ち上げ、星空を見られない人に病院などでプラネタリウムを見てもらう活動などを始めました。

高橋さんの素晴らしさは、「星空解説の現場を平和教育、人間教育の舞台にまで高めた実体験の記録」と理論物理学者の佐治晴夫さんが紹介しています。

星を見上げることは、亡くなった人への思いを託したり、何かしらの思い出とつながっています。3.11の震災の時、満天の星から希望と勇気をもらった話も語り継がれています。

私の「銀河通信」も、銀河のようにたくさんの人がつながってほしいと願い、星好きの夫と名前をつけました。

まだ山登りを始めたばかりだった独身時代仲間と遙かなるトムラウシ山に登り、満天の星を眺めたのが忘れられません。星が手に取るように近く、星がまさに降ってくるのを体に受け止め、感動しました。

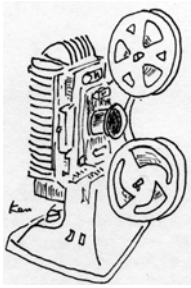
是非、この本から高橋さんの星にまつわる物語を堪能していただけたらと思います。

水俣フォーラムNews　39号

2016年11月2日発行、A5判
87ページ、定価960円

5月に開かれた水俣病公式確認から60周年の講演録です。

解散したSEALDsの奥田愛基さんは「私が私らしく生きる」ためにも声を上げなければいけないんじゃないか、そう思えたとき、やっと、この社会の当事者になれた気がしたと語っています。



この世界の片隅に

片渕須直監督　こうの史代原作

戦中、広島市に住む絵を描くのが大好きな少女すずは、呉市に嫁ぎます。映画は、すずや嫁ぎ先の家族、人々の日常の暮らしを丹念に描き、戦争の時代が伝わってきます。

当時の資料や写真を調べ、関係者にも取材した６年がかりの作品です。広島の街並みや、広島湾、呉に戦艦が入ってくる日などが、再現されています。きっと地元の人が見たら、こんな風景だったと思い出されるのではないでしょうか？

すずの声を演じたのがのんさんです。NHK連続テレビ小説「あまちゃん」で大ブレークしましたね。のんさんはやわらかく、おっとりとした広島弁に加えて、気丈な一面も見せて、こんな素晴らしい役者さんだったんだと見直しました。

すずは、食料が不足する中で、野草を食事に利用したり、苦手な裁縫で、着物をもんぺに作り直したりします。広島にいたころに、すずが恋心を抱いていた青年に再会したとき、彼が「すずさんの普通がいいな。ずっと普通でいてほしい」と語る場面が印象的でした。

戦争の悲惨さを描いた映画はたくさんありましたが、庶民の日常を描いた作品は少なかったように思います。なぜかその場に私もいて、すずと共に生きているような気がしました。

後半に雰囲気が一変します。空襲や原爆投下で多くのかけがえのないものを失ったすずは、深い喪失感を味わいます。

悲しみを抱えてそれでも強く生きていくすずの姿に、何度も目頭が熱くなりました。すずの生きた時代は現代につながっています。

すずが描いた呉や広島の暮らしや風景が挿入されていたのも良かったです。すずさんがいとしくなる映画でした。

平和であることの尊さを、しみじみと感じました。今、自宅の窓から見える木々が茂り、野鳥がさえずるなんでもない風景が、いつまでもあって欲しいと思いました。

この映画を製作するのに市民から資金を募り、3374人から約4千万円を集めたそうです。市民の平和への願いが結実した作品と知り、感動を深めました。もう一度観たい。

歌声にのった少年

ハニ・アブ・アサド監督

「ガザの希望」と呼ばれる実在の歌手の物語です。

紛争下にあるパレスチナのガザ地区。人々の暮らしは厳しく将来の希望を持つには難しい環境で「スターになって世界を変える」とムハンマドは姉と二人の友人とバンドを組み、街角で歌います。音楽教室の先生の指導を受け、結婚式などで歌って、楽器を買う費用をためます。彼らの瞳が輝いていて、困難な状況でも希望を失わない姿に感動しました。

いつもムハンマドを励まし続けた姉は、病気で亡くなります。

7年後、姉との約束を果たすために、タクシー運転手をしながら学んでいたムハンマドはエジプトでのオーディション番組「アラブ・アイドル」への出場を決意します。ブローカーを介して隣国エジプトに越境を試みます。しかし、ビザは偽造で、逮捕寸前。それでもあきらめず、美声を披露して感動させます。

オーデションでは勝ち進みますが、祖国の期待やメディアに注目されて、その重圧で倒れてしまいます。それを乗り越えさせたのはすさまじいがれきの山になった廃墟で暮らす人々や爆撃で足を失った人々の姿でした。

ムハンマドは祖国への思いを歌に託してのびやかに哀愁をこめて歌います。優勝の瞬間パレスチナは歓喜に湧きます。占領下で苦しむガザ地区で、ムハンマドの歌声は希望であり、誇りになるのです。歓喜する人々の実写映像が印象的でした。

一人の青年のサクセス物語ですが、パレスチナで起きている悲惨な現実も是非見てほしいと思いました。

ムハンマドは、現在、国連機構の青年大使としてパレスチナ難民支援をしながら、歌手として世界を飛び回っているそうです。

ハドソン川の奇跡

クリント・イーストウッド監督

イーストウッドと言えば、孤高の人を描いた作品が多いですね。

私は「グラントリノ」が特に好きです。頑固で孤独な老人が命がけで少年を守った姿が目に焼き付いています。

「ハドソン川の軌跡」では155人の命を救い、一躍英雄になったサリー機長が、前代未聞の決断であったために厳しく糾弾され追い詰められていた事実に、イーストウッドは着目して映画化しています。

9.11のテロの恐怖がよみがえるなかで、全員の命を救う物語はイーストウッドには必然だったのかもしれません。

機長の葛藤や苦しみが胸に迫ります。

離陸直後にバードストライクで両エンジンを故障。ベテラン機長のサリー（トム・ハンクス）は必死に機体を制御し、ハドソン川に着水させることに成功。その後も浸水する機体から乗客の誘導を指揮し、全員が事故から生還して、時の人となりました。しかし、機長の決断は正しかったのか？空港に引き返せ

たのではないか？と疑惑がかけられます。一人の死者も出さなかったことこそが大事だと思うのに。事故調査委員会は、人間の判断よりもデータを優先させて、サリーの経験に裏打ちされた判断は軽視されます。理不尽な不寛容に怒りを覚えました。会社は味方するどころか、サリーに疑いの目を向けるのです。もっと、サリー機長は語ればいいのにと思うほど、孤独な闘いでした。機長が大事に守り抜いた当時のデータが入ったノートパソコンと、実証実験で、ハドソン川に着水させるのが最善であったことが明らかにされます。

決して英雄談ではなく、良心と尊厳をかけて闘う姿に共感しました。

ラサへの歩き方 祈りの2400ｋｍ

チャン・ヤン監督

チベットの小さな村から聖地ラサとカイラス山への2400キロメートルに及ぶ巡礼の旅を1年間かけて進む姿を描いたロードムービーです。

ラサに行きたいという叔父の願いを叶えようとするニマに、村人たちが同行するのです。老人も若者も少女もいる11人です。

巡礼旅を通し、チベットの人たちの生き方を浮かび上がらせるために、実際の村人が自分自身の役を演じ、ラサまでの道のりを五体投地（合掌し両手・両膝・額を大地に投げ出し、うつ伏せ、その後に立ち上がるという動作）で進む姿が淡々と描かれます。ドキュメンタリーのようでしたがフィクションです。

チャン・ヤン監督が、“祈る、歩く、眠る、笑う”というチベットの人たちのシンプルな生き方を映像化しました。村を出発するところから五体投地で進む姿を映すのは世界初の試みでした。

雨の日も風の日も、雪の日もある。悪路もあれば、急斜面の厳しい登りもある。なぜ途中でやめないんだろう！と思い、時には眠くなりながら、彼らの姿にいつの間にか、心が浄化されていきました。

若い妊婦は旅の途中で出産し赤ちゃんを軽トラックに乗せて進むのです。親切に「泊まっていけ」と見知らぬ人が家に招き入れる場面。巡礼の仲間のひとりが「俺は運が悪い。人の借金まで背負わされた」等と語ると「自分のために祈るんじゃないよ。他者のために祈るんだ」と諭されます。

あるときは、スピードを出しすぎた乗用車に軽トラックがぶつけられて運転できなくなる場面。急ぐ理由があったにせよ、巡礼の一行は怒りもせず、軽トラの荷台を人力で運ぶのです。

無心に祈る少女の愛らしさにも心揺さぶられました。ちっとも苦しそうじゃないんです。

私たちは複雑な社会で生きています。彼らのシンプルで多くのことを求めない、つましさに清々しい気持ちでいっぱいになりました。

湯を沸かすほどの熱い愛

中野量太監督

がんで余命2ヶ月を宣告された宮沢りえ扮する双葉を中心に、愛する者同士が「家族」としてつながっていく物語です。

双葉は残された時間で家族を成長させようと奮闘し、より強い絆で結ばれて行きます。しかも二人の娘は、血のつながりはありません。

特に中学生の安澄に強く生きていけるように、いじめに負けてはならないと学校へ送り出します。ちょっと強引だなぁとハラハラして見ていられなかったです。母の愛にこたえようと頑張る娘に泣けました。

自分の命が残り少ないと知ったら、私ならどうするだろうと考えさせられました。子どもを自立させたいと願うのは誰でも同じだと思いますが、いくつもの課題を、明るさと強さで乗り越えていく、宮沢りえの演技が圧巻でした。私にはとて真似できないです。

オダギリジョーはちょっと頼りないけど、飄々とした役を演じて、自然でした。オーバー・フェンスの演技も含めて、この俳優の持つちょっと力の抜けた感じがいいです。

やるべきことをすべてやり遂げた双葉が素敵でした。

たくさんのカンパをありがとうございます（敬称略）9.28～11.23

森脇栄一（札幌市）福原正和（札幌市）新西孝司（札幌市）小野有五（札幌市）新井喜美子（北広島市）後藤武（函館市）匿名（札幌市）志田郁夫（酒田市）松浦幸子（調布市）　尾嵜弘子（札幌市）宮森多恵子（札幌市）吉根由紀子（札幌市）森山軍治郎（美唄市）内田篤のり（札幌市）新妻徹（札幌市）高橋春枝（札幌市）富沢克禮（小平市）三田英二（札幌市）安田成男（札幌市）三上妙子（札幌市）柴崎徹（仙台市）佐々木妙子（札幌市）高柳昌央（文京区）小野瑛子（習志野市）林秀起（札幌市）木村玲子（札幌市）加藤多一（小樽市）水野スウ（津幡町）小澤登美栄（八千代市）沼崎勝洋（小樽市）阿保亘（帯広市）室田トモ子（札幌市）神成令子（札幌市）飯部紀昭（札幌市）竹田とし子（函館市）梅沢俊・節子（札幌市）北川麻利子（札幌市）清水和男（福島町）菅沼宏之（札幌市）合計131,000円

カンパの中には購読料も含まれている方もいますが、今回は多数の方から応援していただき、おかげで今までの赤字を解消することができました。ありがとうございました。

残った分は来年の通信の印刷と送料に使わせていただきます。来年3月には200号に達します。紙面への感想やご意見を、是非メールやはがきでお寄せ下さい。来年もどうぞご愛読いただけますようお願いいたします。

安川誠二さん（札幌市）高澤光男さん（札幌市）から著書、梅沢俊さん（札幌市）からカレンダーを頂きました。ありがとうございました。